

■教養教育フォーラム

対談：香川大学教養教育への期待

教育学部教授 村瀬裕也
聞き手 武重雅文

武重 村瀬先生お忙しい中をありがとうございます。先生は一般教育のそしてまた香川大学の名物教授でございました。懐かしいお話ですが、415 大教室に一番似合う先生だったのではと思っております。その先生がこの3月に寂しいかな退官されます。そこで『教養教育研究』の一つの試みとして先生との対談をフォーラムの形で記録し、香川大学の教養教育にこんな方がいたのだということを残したいと、本日の対談を企画致しました。よろしくお願ひします。ところで村瀬先生が名物教授とは言っても若い先生方の中にはそれをお知りでない方もいらっしゃいますので、まず先生のプロフィール、人となりについて記憶を呼び覚ましていただき、どうしてこのような村瀬裕也(?)になったのかというお話からお伺ひしたいと思ひます。

村瀬 中学も高校もさぼりっぱなしの人間でした。組織や体制、制度等とは折り合いがあまりよくない個人的性癖を持っている私が、30年間ここに居座ったということは、余程ここが住み心地の良いところであったと感謝しています。

武重 村瀬先生が大学に入られたのは、確か今でいう大検に近いような制度を通してですよ。

村瀬 大学入学検定試験です。

武重 ヨーロッパにはバカロレアがありますが、先生もそういう経歴をお持ちですね。

村瀬 バカロレアとは違います。

武重 先生はかつて文学青年、演劇青年であったとか。

村瀬 青森の中学の頃から悪仲間と授業をさぼる生活でした。母子家庭で母は仕事に忙しくて息子のことなどかまっていられなかったようです。ところがある日学校から呼び出されて、母はびっくり仰天したようです。でもそこは親馬鹿で、うちの息子は優秀過ぎるから田舎の学校には合わないんだと勘違いして、東京の伯父の家に預けられました。

武重 先生は昭和12年、1937年のお生まれで、丁度日中戦争の時代ですね。そうすると、先生の中学時代は昭和25年頃になりますか。

村瀬 朝鮮戦争が勃発した年です。青森県の三沢は基地の町ですから、その後の反戦思想等にもかなり影響したようです。しかし、その頃は社会科学よりもバケガクの方が好きで、化学の本ばかり読んでいました。

武重 化学少年だったわけですか。

村瀬 そうですね。小学校3年生のとき、担任の先生が休んだ日にブルドックとあだ名をつけられていた校長先生がやって来て化学の実験をしてくれました。二酸化マンガンと塩素酸カリと砂糖を混ぜ、硫酸を落とすととても綺麗な炎で燃えます。熱と言えば摩擦熱の観念しかなかったもので

すから、反応が起こってそこから出る熱、もちろん酸素を出すので、あの光は酸素の作用によるのですが、その後で化学反応の説明を先生がしてくれました。見えている表面世界の後ろにあるカラクリの世界を暴き出すのが化学なんだということで、目から鱗が落ちたわけです。つまり表面の現れの後ろの真相を掴んだときですが、あの体験ですっかり興奮して、以来化学書を読み続けました。もっとも田舎ですから小さな本屋しかなくて、本の広告をめくっては、おふくろのお金を失敬して注文をしたものです。それを学校を休んで部屋にこもって読んでました。悪童仲間とビアホールからビールびんを盗んで、それを売った金で遊び歩いたりもしてたのですが、今振り返るとあれも非行の範疇（はんちゆう）に入りますね。（笑）母親は驚いて僕を東京に出したのですが、別の意味で東京は面白かったですね。何しろ神田に行くとは本屋はいっぱいあるし、三省堂という大きな本屋もありましたから。それに絵が好きだったので上野の展覧会に興奮して、またまた学校どころではなくなりました。

武重 東京の中学校でも学校に行かなかったわけですか。

村瀬 伯父の家に預けられていたものですからそういうわけにはいなくて。でも学校が進学校だったので周囲の人間はみな勉強するわけです。実際のところえらい学校に入ったなと思いましたね。伯父の家では応接室を私の部屋にしてくれましたが、その書棚にドストエフスキーやツルゲーネフ、島崎藤村等が置いてあり、今度はそれに病み付きになり、化学少年から急速に文学少年になりました。学校から帰るとそれらの本を読みあさる暮らしの連続線上で高校に行ったので、入学するとまた例の癖が出てきました。つまり時間を区切られるのが苦手なんですね。一冊の書物を読み始めるとどうしても最後まで読み通したいわけです。そうしないと気が済まないわけです。一番最初にその癖がついたのはスタンダールの『赤と黒』で、とにかくそれが終わるまで結局学校は遠慮して……（笑）。高校に入ったばかりのとき、新聞部の原稿募集の広告を見て、野間宏の短編について書いて投稿した原稿が掲載されたんです。それを読んだ先生から、文学の仲間の集まりに参加しないかと声をかけられました。また松川事件被告救済活動に参加したのがきっかけで、安部公房、真鍋呉夫、針生一郎らのグループ「現在の会」に入れてもらいました。前衛系統の芸術家の団体です。そんなところの会議に行くと世界を背負ったような話ばかりで、高尚な気分になるわけです。ところが高校に行くとまるでガキ扱いですから、結局のところ学校が面白くないわけです。で学校がどうしてもよくなってしまって、作家として早く世に出たいと思ったものです。もちろん受験勉強も手をつける気がしませんでした。でも癖なんですね、理屈っぽくて、段々哲学の方に興味が移っていきましたが、哲学では飯が喰えません。大学等の正規の機関に身を置かなければ生計がたたないの、検定試験を受けたわけです。

武重 作家志望はそこで諦めたわけですか。

村瀬 哲学でなきゃあ駄目だと思いましたね。

武重 そして大学に入りましたが、上智大学でしたね。

村瀬 検定試験は通ったものの、相変わらず受験勉強はやる気がなくて、偶々通りがかりで見つけた上智大学に入りました。当時はあまり知られた大学ではなく、授業料も安くて国立と殆ど変わらなかったように思います。おそらくヨーロッパ辺りの宗教関係者からの寄付で賄っていたのではないのでしょうか。四谷のあの場所で、今のようなコンクリートの建物もなく、ヨーロッパの中世時代のいかにもアカデミーという雰囲気だったですよ。

武重 入ったのは文学部哲学科ですか。

村瀬 ええ、ドイツ哲学科です。哲学にはもうひとつラテン哲学科というのがあり、これは神学の方でした。イエズス会がバックですから。

武重 ドイツ哲学は神学ではないわけですね。

村瀬 それは関係ないですね。上智に入って良かったのはドイツ語がしっかりやれたことです。

武重 上智は教養の語学教育が熱心なのは。

村瀬 ドイツ人の先生は日本語ができますが、訓読、いわゆる訳読の方が厳しかったので、大学院の受験のときには語学の心配はまったくありませんでした。でも会話は駄目なんですよ、僕の場合は。

武重 大学院は京都に行かれましたが、すぐに受かったのですか。

村瀬 ええそうですが、でもその間に失敗がありました。1単位足りなくて、1年間はおぐりでしたね。みんなは京大の院生がひとり入ってきたかと思っただけなのですが、試験でどうこうというよりも当然入れるという前提だったのでしょう。昔はその程度のものを学生は書きますから。

武重 じゃあ学部は結局5年間ですか。

村瀬 いえ1年間は京都大学です。

武重 精神的にはですね。(笑)

村瀬 そこが厚かましいところで、全然違和感がなかったんですね。正式の院生と漢文の解釈で論争したり。

武重 先生の書かれた本にも出てきますが、生きられた時間や生きられる空間のようなものと制度としての学校は対立しますよね。学校は大量に色々な人を教育する場ですから、時間にも空間にも規制がありますが、先生はこれが苦手なわけですね。

村瀬 合わないんですね。ただ、そうは言っても大学の講義にはいいこともありました。霜山徳爾先生、知ってますか。フランクルの『夜と霧』を翻訳した。

武重 読みました。学生時代に。

村瀬 彼の授業は本格的なアカデミズムでしたね。実存分析の立場の人でしたが、自分の扱っている臨床例等を紹介して、完全な学問をやってくれました。あれを聞かないとああいう接点はなかったもので、僕は今でも比較的良好に心理学を利用します。

武重 たしかによく出てきますね。ピアジェから始まってコールバーグ等々。

村瀬 火をつけるきっかけを与えられるのには非常に効果的でしたね。

武重 先生のご専門は中国哲学、倫理学ですが、先生が中国哲学をやろうと思われたのは京都に行ってからですか。

村瀬 ドイツ哲学が専門でしたが、平行して無窮会東洋文化研究所に通いました。上智時代から中国哲学もやってたんですよ。今どきの学生を見ていて甘いと思えるのは、当時の私はドイツ語の本を読み、漢文を読んでいましたから、根性という言葉は好きではありませんが、相当苦学力行しました。

武重 面白いところがあったからできたんでしょうね。

村瀬 上智大学に限りませんが、日本の哲学界はあまりにもヨーロッパ中心主義で、それに反発しました。全人類を視野に入れなければならないとすれば当然、どの文化にも対等な権利を認める必要があるという思いがありました。僕は体系を目指すけれども、材料としてはヨーロッパも中国

も日本も、可能な限りヨーロッパ中心ではない視野をと考えたわけです。だから、ヘーゲルを止めて卒論を中国哲学に切り換えられたわけです。

武重 京大の中哲を出られましたが、それからは……。

村瀬 博士課程から教育学研究科に移りましたが、そこでは殆どが大学紛争に振りまわされました。教育学の研究活動をしないまま、こちらに就職しました。

武重 こちらへは何年に。

村瀬 70年の4月です。大学紛争が少し下火になった頃です。

武重 以後30年間ずっと香川大学におられたわけですね。

村瀬 僕は戦後民主主義の理念に忠実なのです。各地域に大学があるということは、文化の中央集権性を打破するという一面を持っていると思い、骨を埋めるつもりでこちらに来ました。移るなんて気持ちは最初からなかったですね。とにかく世界に輝ける仕事をして、地方大学にあって、中央の方から来てくれといっても蹴っ飛ばしてやろうと、そんな気持ちだったのだけれど……。

武重 僕がここに来たのは先生の12年後ですが、先生はいつも難しい話をされており、いかにも哲学者然とされてました。先生も僕も煙草を吸いますが、先生は絶対にポイ捨てはしなかったですね。電車の中でも煙草を吸われてましたが、ポイ捨てをしたのを見たことがありませんでしたね。それがとても印象的で先生はやっぱり倫理学者なんだと思ったものです。丁度その頃に戴震（「戴震の哲学」）の話で香川大学教育学部の論集に報告を連載されていました。それを大著としてまとめられましたのですね。

村瀬 これは不幸な運命の本なんです。書名は知られていますが、僕は哲学に対してものを言うつもりだったのですが、哲学をやっている人はヨーロッパのことしか哲学だと思っていないものですから、これも単なる中国哲学史の本だと受け止められてしまいました。しかし他方ヨーロッパ近代哲学のタームで構成しているので、今度は中国学者が付き合ってくれないわけです。その点、哲學家として一括して扱う中国辺りでは受けがよくて、中国語訳はよく売れ、版を重ねています。

武重 その点は一貫していますね。いわゆる中哲の専門家ではなく、一哲学者が中国哲学を研究するということですね。ですから、使うタームも洗練されたヨーロッパ系のタームになっている。

村瀬 洗練はともかくとして、まあそういうことです。ですから日本の中国学者からあまり歓迎してもらえないわけです。

武重 僕が先生と出会ったのは82年のことですが、その後も何冊か本を出されました。それから教科書的な本も何冊か出されておりますね。

村瀬 『荀子の世界』と『人間と道徳』ですね。

武重 一般教育部で先生とお会いする度にいつも論陣を張られており、滔々と教養の理念について触れられていたのをよく覚えておりますが、一般教育部における村瀬先生の活動と言うと先生は何を思い出されますか。

村瀬 こちらに来た当初、一般教育を受け持つことは判っていましたが、『一般教育計画要綱試案』の分担執筆をさせられました。一般教育部になる寸前のことです。

司会 カリキュラムですか。

村瀬 教養教育、一般教育の位置づけですね。それとカリキュラム等です。

武重 その重要な部分を先生が執筆されたわけですか。

村瀬 いえ、分担執筆でしたが、赴任直後のことで講義ノートすらまだ書いてなくて、いきなりの作業でした。70年のことですが、音頭をとっていたのは堀地先生でした。でも哲学をやっていたお蔭で何とか合格点をもらいました。

武重 凄いですね。一般教育部の最初の理念づくりに参加しているわけですね。アメリカ風に言うとファンディング・ファザーズ、一般教育部創設の父の一人ですね。

村瀬 堀地先生と一部合わなかった点は、先生はこの大学に献身するのであれば教育が中心だというお考えでしたが、大学は学問が中心のところという観念が僕にはありましたし、大体ガキの頃から哲学をやりたくて来ているものを、ここになって止めろというのは納得できませんでしたね。もっとも止めろとは言われませんでした。

武重 丁度僕が来たばかりのときですが、総合科目の運営委員会で堀地先生と村瀬先生もおられ、堀地先生は“村瀬君はいつまで経っても研究、研究と言って、教育や組織の問題は全然考えてくれないからな”とおっしゃっていたのを覚えています。

村瀬 そんなこともありましたか。

武重 そういう村瀬先生も堀地先生が辞められる頃、『戴震の哲学』を上梓された後になって、『一般教育研究』を中心に教養問題についての論文を随分と書かれておられます。できるだけ雑務は避けたかったと言われた先生が、なぜこんなに沢山のものを書かれることになったのでしょうか。

村瀬 雑務として位置づけるのではなく、一つの学問の仕事だと位置づけました。同僚と一緒にやったものもあります。たとえば「ヒューマニゼーションの学問性」は、共同研究の一部です。でも書くものについては、そこから外しても他の論文として通用するような書き方に心がけました。自らを潰さないで協力をするというわけです。僕のことを、人によっては謀略家だと評しているようです。

武重 謀略家ということはないでしょうが、ご自分のスタイルを一貫して持ち続けられたことは間違いないですね。

村瀬 スタイルだけなら僕はガキの頃から一貫してましたね。それで生きてこられたのかもしれない。好きなことしかしないという我が儘がありました。

武重 周囲の人や一般社会に認められながら自分を通すには相当に高等なテクニックが必要ですね。

村瀬 でも我が儘を周囲に認めさせるにはある程度自分の力量を上げておかなければならないでしょう。

武重 長島茂雄が実は一生懸命練習をしていたというようなものですね。見せてはいけないわけです。表向きには何もしていないように見えますが、実は水面下では一生懸命にかいておられるわけです。これが村瀬流の生き方ですね。

村瀬 高校時代に安部公房等と接点がありましたが、例の50年問題などに接して、どっぷり浸かってしまうと、結局後になって馬鹿を見る人たちを多く見て来ました。毛沢東がまだ信じられていた頃、毛沢東、毛沢東と言っていた人は後で自己反省しなければならなくなりました。まだソ連はある程度美化されていましたが、それに同調した人も後で自己反省しなければならませんでした。そういう馬鹿な付き合い方はするまいというのがあの頃から身につけています。世の動きにそっぽを向いたりノンポリを決め込んだりするのとは問題だけれども、ある種の間接構造を持ちながら生きるというのも一つの知恵だ、ぐらいのことは書いていただいてもいいでしょう。これは一種の教養だと思いますから。

武重 僕流の表現をすとしたたかさですね。ある程度同調し、同化しながら、違うところで異化するというわけです。そうして自分のスタンスをずっと保つということは、やはりしたたかであったということでしょう。ところで先生が書かれた教養関連の業績がかなりありますので、それについてお話をお聞かせください。僕が調べたところによりますと1981年に『教養教育研究』の前身の『香川大学一般教育研究』という雑誌に「ブレヒトのガリレイ像——教養について——」というのを書かれておられますが、これは非常に洒落た文章で、語り言葉で書かれたものです。なぜこのような形態をとられたのでしょうか。

村瀬 その年の授業で使ったものです。つまりある程度総合ということを考えて、プロゼミ、一つのプロゼミではなくて、プロゼミは参加が重要ですから、討議したり考えたりを複数の視点から総合するというので、近藤さんとタイアップしたものです。近藤さんがガリレイの科学理論、そして僕が幾らかガリレイに関係のある文学の方のブレヒトを担当しました。両方とも主題には共通性がありますが、一方は文学でもう一方は科学だと。その辺りがある程度複眼化しながら、専門主義とは別の教養的視点を打ち出そうというのが最初の計画でした。そして最後のときに二つのグループを併せて講義をしたもので、その講義のテープを起こしたものですから語り口調になっているわけです。

武重 ここではブレヒトの異化作用を取り上げていますね。アリストテレスの伝統的な演劇理論、つまりカタルシスの理論では、悲劇がその一番のパターンですが、それに対して通常、異化は逆ですからコメディや笑いを起こさせるメカニズムでもあります。

村瀬 敢えて解釈すればアリストファネスなんかは異化的な要素を持っているかもしれませんが、けれどもコメディと言うとどうかと思います。これは知的な作業だと僕は思っていますから。日常的なもの、我々が馴染んでいるものを変形して、これはおかしいのではという知的な関心呼び起こすという作業で、一種の批判的な意識作業だと思っています。たとえば、エイゼンシュタインの「モンタージュ理論」とか、中井正一の映画論での「カットの文法」「コプラなき思想」も同様で、画面と画面の切れ目に観客に対する問いかけがあるというものです。そうすると観客は向こうから一方的に影響を受けるのではなくて、そこから自分の歴史的な意識を呼び起こされ、自分も歴史の主体となるような関係を取り結ぶというものです。このような批判的な精神を一応、教養的精神と設定して、そしてその異化効果の理論をそこに組み込んで、ついでに演劇も面白がってもらおうという授業構成だったわけです。

武重 お話を聞いて非常に興味深い授業だと思いました。いつだったか雑談の席で先生に「ブレヒト論」を聞いたことがありましたが、このような形の授業の報告であったとは知りませんでした。近藤先生、つまり現学長と共同授業を行い、二つの全くミスマッチなものをぶつけ合うことによって、批判的精神を呼び起こそうという意図をもっていたわけですか。そうすると、これは総合化することにも関わってきますね。

村瀬 そういう意識がありました。できれば色々な演習科目が共同の場で発表会でもするような総合性が成り立てばと願っていましたが、そういう考えでしたが、実践力不足に終わってしまいました。

武重 このような授業には教師側にも大変な努力とエネルギーが求められますね。では続いて、『一般教育研究』に先生が登場するのは1987年です。少し時間が空きますね。

村瀬 静かにしてましたかね。

武重 そこで発表されたのが「ヒューマニゼーションの学問性」です。僕が読ませていただいた先生の論文の中では一番の力作だと思っているのですが、ここでは教養問題の学問化、人間化が強調されていますね。そして人間回復を学問、ことに教養のなかの学問性に求められています。

村瀬 教養教育というものを教育の問題としてだけ捉える人がいますが、僕はそれを学問の問題として取り上げたかったんです。しかし、教養に供される学問というと、専門の先端的な研究の単なる咀嚼と言いますか、大衆化とか入門とかの性質のものがほとんどです。そうではなく自分のやっている学問や研究が再度反省された、新しい反省段階、新しい意味を獲得した段階として組織化されなければいけない。それがどうしても人間の実現という課題と結びついている以上、再学問化するという作業はやはり人間化の作業なのだというのがその論文の主旨です。

武重 難しい論文ですが、とっかかりはフェニックスの意味論ですよ。フェニックスの本は『意味の領域——一般教育の考察——』ですが、これにも歴史性があり、読んでいて『一般教育研究』を回顧するときには触れておかなければと思いました。この本は当時教育学部におられた笹本先生が紹介論文を書かれたわけですか。

村瀬 そうです。『一般教育研究』創刊号に書いてくれました。(笹本正樹「一般教育カリキュラムのための哲学：フィリップ・H・フェニックス『意味の領域』について」『一般教育研究』創刊号、1971年)ただそのときはまだ翻訳がなかった頃で、それが日本で一番最初の紹介です。

武重 意味論はもとを辿れば言語学の話になりますね。

村瀬 ただ、その場合の意味はたとえば、語や文の意味という場合の意味ですね。リチャードとオーデンの『意味の意味』という本がありますが、意味の使い方は、個人によって違うほど多様だと書かれています。言語意味論は一つの大きな系譜ですが、そこからはみ出した、いわゆる価値という言葉と等値できるような意味の用法もあります。僕自身は言語意味論から抜け出させておいた方がよいと思い、フェニックスを使いました。人生の意味というような場合の意味です。これをどう解釈するのかということが問題ですが、僕は少々無理して、一般に価値と言われるものうちでとくに人間性のイデーとの関係づけで課題性が自覚されたような価値、それをこの場合の意味としたわけです。

武重 そうしてヒューマニゼーションという言葉を使わざるを得なくなってくるわけですね。

村瀬 価値論の側面から主として考え、学問を人間の価値実現という課題との関係で意味回復させるというところに教養的な学問性が成立するという主旨です。

武重 たしかに、学生たちの様子を見ても、教養を受けて何の意味があるのだと彼らはよく言います。彼らの意味は、何の役に立つのか、あるいは何に機能するのかというのがほとんどですね。それも短期的な役立ちであつたり機能です。これは大人に関しても大同小異で、人生規模の意味という発想にはめったに出会いません。

村瀬 彼らがそう思うには仕方のない側面もあって、1960年ですか、国民所得倍増計画の第3章に人的能力開発論があり、そこで戦後の教育理念を抜本的に変質させましたね。そして人間の評価は役立ちの価値に置かれましたよね。何か役立ちの価値と結びつかないと価値とか意味とか言われなような風潮が段々出来上がって来た面もあると思います。そこから人間としての人間を奪還するというのも教養の一面だと思います。

武重 それは非常に大事なことです。逆に言うと専門教育自体が何の役にたつのか、どういう意味が

あるのかという発想でとられると、専門教育自体が何かの職業につくためのもの、そういう目的を持った学習であり研究になってしまいます。

村瀬 つまり、何らかの形で目的からの自由と受け止めた方がいいかと思いますが、そういった領域を私ども人間は確保しておかなければなりません。役立ちのための道具で一生をみすみす終わってしまうというのは人間性の理念からも大いに問題です。

武重 この「ヒューマニゼーションの学問性」についてもう一つ興味深いのは、この論文が掲載されたのが『一般教育研究』の「FD」の特集号だったことです。ファカルティデベロップメントという言葉は、今でこそ一般化していますが、当時は非常に新しいものでした。そしてこの特集号では、いかに巧く効率よく教えるかという観念、つまり単純な教授法の問題ではなく、ファカルティ、つまり教授団自体がいかに一貫した姿勢を持って学生の教育に当たれるかという問題発想が打ち出されていました。そこで先生はテーマを少しずらして、FDとは言わずにヒューマニゼーションとおっしゃっているわけです。

村瀬 教育自体が教授スキルだけにとらわれて、いわゆるポピュラリゼーションだけに終わるのでは面白くありません。教育自体をヒューマナイズされた、面白みのある、色艶豊かな文化世界として再学問化することがFDの基本条件だという気持ちがあったのだと思います。

武重 そして、次に書かれたのが「教養としての総合」です。これも『一般教育研究』の「総合」特集号ですね。

村瀬 これは全国的に総合科目が問題になっていたときと呼応してのことですね。これもやはり流産という悲しい運命のように僕は思っています。ハーヴァードのコアカリキュラムがそうですが、総合というのはカリキュラム全体の総合ということでしょう。日本の場合は矮小化されて、ひとり当たり1時間～2時間の講義を複数の先生が担当するのを総合と称していたわけですよ。それを何とか克服して本当の意味での総合性が成立しないかと願って書いたのたですが、だから僕がここで書いている総合は1総合科目の問題ではなく科目連携の問題です。それが後に主題別という発想に繋がる性質のものであったと思います。

武重 今の発想は「プレヒトのガリレイ像」の頃からの一貫した視点ですね。

村瀬 人間としての主題は統一的であると。そうですね、最初にこのインテグレートコースというのが構想されたのは1951年のことです。要するに8単位とか12単位とかですが、やはりある種のスケールを持ったものを当初は考えていたと思います。やはりこの帰結も日本の矮小化ですね。

武重 日本的かどうかは判りませんが、結局旧来の人文・社会・自然の3系列がありましたが、それとは別のカテゴリー、総合としてたてようという、その程度の実験でしたね。

村瀬 そうです。この時期総合科目が全国的に問題になった頃ですが、広島大学の式部さんがハーヴァードの例を紹介していましたが、これはカリキュラムレベルでの総合という発想でした。

武重 このハーヴァード方式も勉強されて、この後主題科目を新しく立ち上げるときに先生の理念が反映されていくわけですが、先生の頭の中には旧来の総合科目以来、日本的矮小化を一度もとの形に戻し、主題科目という形で発展的に解消しなければならないということがあったんですね。

村瀬 そうでしたね。「教養としての総合」の中では主題として4項目をあげました。

武重 この論文における先生の主張の中心かと思いますが、総合とはどういうテーマを設定するのかというときに、その4項目がでてきます。まず①歴史的中心問題。これは人類史と関わって重要

な歴史的問題を扱わなければいけない。②学生を能動的に参加するという形態を提示しなければならぬ。つづいて③異化効果。複数の視点を最終的には異化する。最後に④教養としての総合における文化・芸術の役割です。ここでの異化とは、もちろん学生が異化することですよね。

村瀬 異化効果を上げるために、つまり相手が異化するために当たり前と受け止めている現実を教師が変形して見せるということです。

武重 もし異化できなければ学生はさっぱり判らなかつたことになりますね。

村瀬 そうですね。でも自己中心になると困りますが、そういう意味ではなくて、自立することです。

武重 学生さんたちを見ていて思うのですが、あまりに自明性にとらわれて、それが退屈であるというのを嫌になるほど知りながら、そこにいることの安住さということで安心しているような気がしてなりません。ということで、僕自身も教養教育はまず最初に揺るがさなければいけないと思っています。

村瀬 ある意味では異化は揺るがす性質ですね。

武重 それから、先生らしいなと思うのは、教養としての総合ということを見ると文化芸術が重要だという主張です。

村瀬 どう思われますか。(笑)

武重 なぜ芸術でなければいけないのかですね。

村瀬 一つはツヴェックフライ (zweckfrei)、目的からの開放です。シラーは人間の特権や身分的拘束等の夾雑物から人間を切り離すときに、美しき仮象にたわむれる世界が必要だと言っています。だからギリシャでの格闘技も真剣に相手を打ちのめすという実際的な目的を追求するのであればとんでもないことになります。そうではなくてお互いの技を競い合うという遊戯なので、追求されているのは技や力、いわゆる自己達成価値そのものの追求です。そういうことを目的拘束性から切り離して陶冶しておく必要があります。陶冶するだけでなく、生活の一要素としてそれを組み込むような知恵をこれからの日本人は持つておくべきだということが一つです。それからもう一つは、芸術の美的な領域は一番人と抗争し合う場面から切り離される性質、それから実利のために打算を働かせるような功利的な心情から解放される性質をもっているということです。

武重 心理学風の言葉で言い換えると、たとえばフロイトの議論では自我発達の一面は自己防衛、自我を防衛するための様々な手練手管、防衛のメカニズムを発達させることです。ところが、防衛ばかりしていると非常に息苦しくなります。一度それを解放してやるという側面が必要です。フロイトは解放してやる側面というのをあまり議論していませんでしたが、晩年になるとそれを議論し始めました。

村瀬 解放するというのはやはり芸術の一つの役割ですね。

武重 確かに芸術体験やある種の宗教体験、至高体験といえるものは、防衛的な自我を解放していく大きな契機になるのだと思います。そしてただ単に解放するというとストレスが解消したというレベルで終わりますが、実は長期的に人生の中においても一度内省してみると、今まで経験したことのない、新しいものをきつと獲得していて、これは一つメタのもう一度自分を振り返る契機になる。ただ、目的自由というならどちらかと言うと遊びの領域の方が、経験しやすいし分かりやすいのではないのでしょうか。少々手前味噌ですが、先生も近年はこの問題にも触れておられます。1991年の『一般教育研究』では「ヘルマンヘッセの『ガラス玉遊戯』における総合理念の

性格」を發表されました。そこでは、美意識とともに遊戯衝動についても触れられ、理性と感性の分裂を止揚する重要なものと指摘されています。この論文で先生が『ガラス玉遊戯』を使ってとくに言いたかったことは端的に言うとうどういうことでしょうか。

村瀬 やはり目的自由の処理ですね。トーマス・マンが言っているように、ドイツの精神世界は二つに分裂してしまいました。一方は教養主義で、音楽や美術、文学が現実問題と離れた地平で追求されたということです。そうすると一方にはえげつない現実主義だけが残されます。つまり現実性の方は全く高い価値の媒介なしに進行して、ここでは利潤の追求から殺戮に至るまで現実性が突っ走り、精神世界の方は現実は無責任になってしまふ。ヘッセの場合は現実があまりにもえげつなく突っ走り過ぎた方にひっかかっているわけですね。時代が時代ですから。だから精神世界を何とか守ろうとした。そういう世界を人工的に造ることで精神的な部分を守ろうとした。それはそれとして目的自由の世界として見るに値する。しかし現実から切り離されると、逆に精神世界も無意味化していく。活動する現実場面に精神的なものが回復されなければいけない。政治問題等の現実の問題にかかわる活動の中に精神的なものが媒介されているのが教養的な世界であると。そして教養教育にも、一方では人類に普遍的な平和、環境、歴史などの現実的な主題を考えておかねばならないし、他方では総合化に資する芸術、スポーツなども重要だということになります。

武重 今お聞きして、もしかしたら僕も先生に少しは影響を与えたのかなと思うのは、今まで芸術の話がされていた先生がスポーツもここに入れておられるんですね。

村瀬 そうかも知れませんが、教養教育を担当する人間が、いくらスポーツ音痴といっても現実的な構想ですから、スポーツも自己達成価値をそのものとして追求する一つのあり方として、当然教養教育の中で芸術と対等な位置を持つでしょう。ただ自分の運動神経とはまた別問題です。

武重 先生が県民プールで一生懸命に泳いでいる姿をお見かけしたことがあります。

村瀬 僕がやると遊びではなく、どうも修行になってしまうんですね。

武重 面白くないですか。

村瀬 いや、軽く進み出すと、中井正一のスポーツ体験ではありませんが、苦しい中にスッと抜けるという、そんな気分にはなります。でも僕の場合はそれ以上に水泳を終えた後のビールがいいわけです。(笑)

武重 最後のビールは同感です。ところで先生はその後に香川大学が教養教育システムに変わり、『香川大学教養教育研究』という雑誌が初めて出た創刊号に「教養教育の復権のために」を書かれておりますが、この論文ではまず日本の教養教育史に始まり、そこでなくしていったものとか、日本的教養教育の駄目なところを歴史社会学や教育史の立場から書かれた文献を参考にされながら議論されていますが、とくにこの論文で先生がもの申したかったのは。

村瀬 筒井さんも渡辺さんも触れていますが、日本の場合はどうしても修養主義と教養主義が対立関係にあって、教養主義は旧制高校を中心としたエリート文化としてだけ残っていて、修養主義の方が一般の人々を支配したと。こちらの修養論の方には教養という概念が入ってこなかった。教養の方は勢いエリート化して大衆化しなかった。そういう一つの不幸があったと思います。戦後になると教養主義的議論の対抗としてアメリカ型のいわゆるジェネラル・エディケーションの概念が入ってきました。アメリカ型市民教育ですが、こちらの方はかなり生活至上主義的な一面を持っていたと思います。民主主義の形成には役に立った面もありますが、その観点から教養主義

に対しては攻撃の矛先が向けられたわけです。しかし教養主義の持っていたものにも非常にいい面があったということを再確認したかったわけです。

武重 目的自由に気付いている生き方と、非常にクリティカルなスピリットを持っているものの見方というものは戦前の教養教育の中にもあったわけですか。

村瀬 ありましたが、そうでなかった面もあります。単に趣味的なものに逃避したり、ディレッタント的な一面を持ったりした面もありましたが、良質な教養がないわけではなかったと思います。マルクス主義でさえ教養主義の土台から出てきたのですし、戦争に反対した文化人の多くも、教養主義には反対していましたが、人一倍それを体得していた人たちでした。そうした教養が単なるジェネラルエディケーションで解消していいのかとなると問題があります。とくに市民教育といった場合、市民として賢く生きるという側面が強いですよね。が同時に人生は高尚に崇高に生きられなければならないわけです。やはり美しく価値をもって生きられなければなりません。そういうところに日本の修養主義を中心とした質実剛健精神が浸食してきたわけです。そして今また、市場原理や競争原理等、実利主義的な質実剛健精神の方がアンバランスに闊歩し始めています。それらに対する制御装置はどうしても必要だと思います。そこにはやはり一つの文化精神、人間性のイデーと接点を持った文化的な人間の実現の精神が関与しなければなりません。それからもう一つ、僕流の言葉で言えば、人類の歴史全体を人間の人間化活動の過程、つまり人類の教養史として把える視点から見たときに、教養主義の生かすべき領分があるだろうということです。

武重 先生はそうした精神のもと、主題科目を立ち上げるときにも活躍されました。今回先生が出されたものを読んで気づいたのですが、『教養とヒューマニズム』のある章に書かれている文章と、『香川大学教養教育就学案内』に書かれているある主題科目の説明の文章は極めて類似していますね。オーケストラの比喻、専門と教養の二つが有機的に連関しているということをオーケストラの中の一演者と対比させて語っておられる箇所です。(笑) きっと修学案内も先生の作だと思いますが、教養教育も今大きな変革期を迎えています。現在の教養教育の中には守らなければならないものもありますし、新しく造っていかねばならないものもあると思われませんが、先生が去って行かれる遺言状としてこれは香川大学の教養教育に期待したいということをぜひお伺いしたいのですが。

村瀬 まず第一は、今は学生対策ということで教育が非常に重視されています。もちろん我々は教養教育ですから、教育の問題でもありますが、その前に学問ということが忘れられては困ると思います。もちろん学生の実情を考慮しないでやるわけにはいきませんが、考慮するということが質を下げるということと対になっては困るわけです。工夫はするけれども、そこには先程のヒューマニゼーションの中でも言ったように、絶えず学問を再学問化するという高度な知的操作が含まれていなければいけない。その大学的な営みがなくなるとは困ります。単なる職業訓練になったり、あるいは学生対策的な方向、対症療法的な方向にだけ傾いては困るというのが一つです。それから学生の状況が問題になっているとは言っても、学生は一律には扱えません。色々な学生がいますから。その中には少数ですが大学生らしい学生もいます。そちらの方を忘れては困ると思います。大学ということを忘れないで欲しいと思います。ただ大学入学前の教育に問題があって、そこから学力の低下やモラルの低下等の問題状況が発生しているわけですが、だからといって大学がその尻拭いにだけ追われるのは問題です。やはり大学は大学であって欲しい。それから、やは

り基本になる科学の自己反省としてのメタ科学と、現代的な問題というふうに矮小化されない歴史的中心問題、人類の歴史を貫く問題……。

武重 生命や環境、平和等ですね。

村瀬 そうです。それらを中心に据えなければならない。それから役立ちの価値からある程度解放された、ツヴェックフライでいいのですが、人間の自己達成価値の追求の場も確保して欲しいと思います。それは芸術でありスポーツであるわけですが、ブレヒトが指摘したように、学問と芸術を分断し、芸術はアミューザントで、学問は面白くはないが真理だという分け方は困るわけです。学問もアミューザントでなければいけないし、芸術にも知的認識が貫かれなければならない。学問は楽しいものだというような色彩を持った学問の建設が必要です。それとやはり古典を重んじて欲しいと思います。古典は人類の教養史の証験であり、不朽の価値を持ったものです。それをマスターしながら次に歩いて欲しいわけです。

武重 これらは主題というような形式のもとで行われていく科目として考えておられるものですか。

村瀬 主題に入れようと思いましたが、現状、とくに担い手とマッチしない面もあってその通りにはなりません。これは共通科目でも演習科目でもいいですから、そうした精神を生かしていくということです。

武重 必ずそういう授業科目をどこかに入れてということですね。

村瀬 そうですし、そうではない授業科目でもやはり大学的雰囲気は決して失わないで欲しいですね。自分たちの直接の利害にとらわれなくて人類の知恵を生み出すような、大きなものに対して責任を負うような非実利的な精神ですね。僕はよく引用しますが、室鳩巢が“灯台もと暗し”はいい意味なんだと言ってるんです。もとを照らすのは今日のことはよく見えるけれども遠くは見えないということだからと。今日起こっているごたごたは巨視的視野に立てばあまり意味がないことかもしれません。IT革命などと騒いでいますが、あれも人類の生活全体からすれば単なる部分的な技術のことにすぎないかも知れない。本当は人間の実現という大きな生活の中にもう一度位置を取り戻さなければならない。そうだとするとともに暗くても先が見えるという視線こそ大学では必要だろうと思います。

武重 ありがとうございます。

(後 記)

今回の教養教育フォーラムという形態は、旧来あまりないものであるが、一般教育部時代から教養教育の論客の一人だった村瀬先生が3月をもって定年退官されることを考え企画した。先生には今号に是非寄稿して頂きたかったが、退官前のご多忙でお願いできず、それもあって行った企画である。当初、「これからの教養教育への期待」というテーマで執筆をお願いしたいと考えていた。先生がこれまでに教養教育について論究された論文での主張を踏まえて、これからの期待を書いていただければ、後輩たるわれわれにとって教養議論の展開を知るばかりでなく今後の指針にもなる、というのが執筆依頼の趣旨であった。ご多忙のためままならず、では対談の形で当初の編集趣旨を全うしたいと考え、こうした形態で公表することを思いついた。

対談では、先生のライフヒストリーを含め、研究においてもその発展の経過を再現したいと考え、ヒストリカルな話題展開に心掛けた。先生の人となりや、教養教育論がどれだけ聞き出せたか心もとないが、村瀬理論の一端は表現できたのではと思っている。

対談の最後に「僕の理論はもう古いんです」と先生は言われた。しかし温故知新、先生の議論に耳を傾ける必要は今も減じてはいまい。香川大学教養教育の礎になればと対談をお引き頂いた先生に感謝したい。そして、この企画が教養教育に関する香川大学の議論を活発化し、さらなる発展に繋がれば先生にもお喜び頂けるものと思う。それを念ずるばかりである。

最後に、対談の中でも登場した村瀬先生の教養論関係著作の略譜を記しておく。

- ・『香川大学一般教育計画要綱試案』（分担執筆）香川大学一般教育担当教官会議、1971年。
- ・「一般教育演習科目について」『香川大学一般教育研究』第3号、1973年。
- ・「ブレヒトのガリレイ像—教養について—」『香川大学一般教育研究』第19号、1981年。
- ・「ヒューマニゼーションの学問性」『香川大学一般教育研究』第31号、1987年。
- ・「教養としての総合」『香川大学一般教育研究』第33号、1988年。
- ・「ヘルマン・ヘッセ『ガラス玉遊戯』における総合理念の性格」『香川大学一般教育研究』第39号、1991年。
- ・『教養とヒューマニズム』白石書店、1992年。
- ・「教養教育の復権のために」『香川大学教養教育研究』創刊号、1996年。

（文責：武重雅文）